



亀中だより

No. 15 令和7年7月4日 文責 岡田

For The Students!

亀山中学校では、かつては沖縄へ、そして昨年には広島への修学旅行で平和学習に取り組んできました。3年生は修学旅行への事前学習（平和学習）を重ねたうえで、訪れた平和記念公園で原爆ドームや平和記念資料館を見学し、平和セレモニーを行いました。

人類史上最初にして唯一の被爆国である日本として、広島や長崎での出来事を正しく受け止め、核兵器廃絶、平和を考える出発点とする

べく、広島での修学旅行に取り組みました。しかしながら、かつてから大切にしてきたように一般住民を巻き込んだ悲惨な地上戦が繰り広げられた沖縄のことも私たちはしっかりと理解し、受け継いでいく必要があります。

6月23日は「沖縄慰霊の日」でした。沖縄戦では、日米合わせて20万人以上が亡くなりました。このうち約19万人が日本側の犠牲者です。沖縄県民は、一般住民約94,000人（推計）、軍人・軍属28,228人の計約122,000人が亡くなり、県民の4人に1人が犠牲になったと言われています。

平和祈念公園での追悼式、今年の「平和の詩」に選ばれたのは、伊良波小学校6年生城間一步輝（いぶき）さんの「おばあちゃんの歌」でした。戦争を生き延びた人を「艦砲射撃の食べ残し」とする歌詞、祖母が「あの戦のときに死んでおけばよかった」と話すのを聞いたときの思いをつづっています。生きること、命をつなぐこと、その命を使って一生懸命に生きることが、力強く伝わってきます。

沖縄慰霊の日



平和の詩「おばあちゃんの歌」

豊見城市伊良波小学校 6 年 城間 一步輝

毎年、ぼくと弟は慰霊の日におばあちゃんの家に行って仏壇に手を合わせウートーをする

一年に一度だけおばあちゃんが歌う
「空しゅう警報聞こえてきたら 今はぼくたち小さいから 大人の言うことよく聞いて
あわてないで さわがないで 落ち着いて 入っていきましょう防空壕」

五歳の時に習ったのに八十年後の今でも覚えている
笑顔で歌っているから楽しい歌だと思っていた
ぼくは五歳の時に習った歌なんて覚えていない
ビデオの中のぼくはあんなに楽しそうに踊りながら歌っているのに

一年に一度だけおばあちゃんが歌う
「うんじゅん わんにん 艦砲 ぬくえーぬくさー」

泣きながら歌っているから悲しい歌だと分かっていた
歌った後に「あの戦の時に死んでおけば良かった」と言うからぼくも泣きたくなった

沖縄戦の激しい艦砲射撃でケガをして生き残った人のことを「艦砲射撃の食べ残し」
と言うことを知って悲しくなった

おばあちゃんの家族は戦争が終わっていることも知らず 防空壕に隠れていた
戦車に乗ったアメリカ兵に「デテコイ」と言われたが 戦車でひき殺されると思い
出て行かなかった

手榴弾を壕の中に投げられ おばあちゃんは左の太ももに大けがをした
うじがわいて何度も皮がはがれるから アメリカ軍の病院で
けがをしていない右の太ももの皮をはいて皮ふ移植をして何とか助かった

でも、大きな傷あとが残った 傷のことを誰にも言えず 先生に叱られても 傷が見える体育着に
着替えることが出来ず 学生時代は苦しんでいた

五歳のおばあちゃんが防空壕での歌を歌い「艦砲射撃の食べ残し」と言われても
生きてくれて本当に良かったと思った

おばあちゃんに生きていてくれて 本当にありがとうと伝えようと
両手でぼくのほっぺをさわって「生き延のびたくとう ぬちぬ ちるがたん」
生き延びたから 命がつながったんだね とおばあちゃんが言った

八十年前の戦争で
おばあちゃんは心と体に大きな傷を負った
その傷は何十年経っても消えない

人の命を奪い苦しめる戦争を二度と起こさないように おばあちゃんから聞いた戦争の話を伝
え続けていく
おばあちゃんが繋いでくれた命を大切にして 一生懸命に生きていく